自分たちの問題として

嬉野京子さん（下）

うれしの　きょうこ／1940年東京生まれ。報道写真家・ディレクター。長年、沖縄を取材し続け、米軍基地問題での発信を続けている。著書に、『戦場が見える島・沖縄－50年間の取材から』（新日本出版社、2015年）など。

■うるま市の事件

2016年4月に沖縄県うるま市の20歳の女性が米軍軍属（元海兵隊員）に殺されましたが、それが明るみになったのは、沖縄の二つの新聞社の報道でした。20歳の女性は1995年生まれです。1995年といえば、沖縄の米兵による少女集団暴行事件が起こったときです。当時12歳の小学生の女の子が米兵3人に拉致され、集団強姦されました。それに県民の怒りが爆発して保守も革新も統一した県民大会が開かれたのです。みんなもう二度とこんな事件を起こさせないという思いでしたが、その年に生まれた人が殺されてしまいました。

うるま市の事件を受けて、抗議と追悼のための緊急集会が嘉手納基地のゲート前で開かれるというので、私は現地までのチャーターバスに乗り込みました。バスの中の空気はとても重く、基地反対の運動をいつもやっている人ではない人も乗っていました。

バスの責任者が、「ぼくが統一連の共同代表をやっている○○です」とあいさつをしたところ、一番前に座っている男性から「統一連ってなんですか？」という質問が出ました。沖縄の運動をやっている人にとって統一連はみんな知っているもので、そんな基本的な質問が出るとは思っていなかったので、責任者の人は戸惑っていました。その方は、「愛知から過去2回沖縄に来て、名所だけを回っていたけれども、その間に沖縄の暮らし、基地がたくさんあるのを見て、他の県とは比べものにならない状況があることを知った。自分の足でこの問題を考えたいと思って、戦跡を回っていて、今朝の新聞でこの集会があると知って参加した」と言っていました。

集会では、みんな口々に人ごとではないんだと言うのです。次に被害に遭うのは、自分の孫かもしれない、娘かもしれない、自分かもしれないと思うわけです。これまで問題を知らなかった人も、いてもたってもいられなくなって集会に参加していました。

集会の帰りのバスの中で隣のおばさんが、「いやー沖縄のことを知らないのは本土の人だけじゃないんですよ。自分は映画『標的の村』を観るまでは、高江があんなことになっているなんて知らなかった」と話していました。

■知らされない実状

沖縄への渡航許可が出なかったことなどにも現れているように、米軍や日本の政権は沖縄で起こっていることを隠したい、知られたら困るということなんです。高江でオスプレイが離着陸するヘリパッド建設が強行されていることを知られたくない。伊江島ではオスプレイやステルス戦闘機を使用するための基地の拡張が進められていますが、そのことも沖縄本島、本土の人々から隠したいのです。伊江島での基地拡張の問題は、あまり知られていませんが、そこにも目を向けてほしいと思っています。

運動にかかわっている人はネットで情報が入ってくるけれども、沖縄がそんな状態だと知らない人が圧倒的に多いのです。そういう人たちにどう広げていくのかが課題になります。

1982年にミサイルのトマホーク配置に反対する集会がありましたが、その後、毎週金曜日の昼休みに集まる金曜昼デモに引き継がれ、現在も続いています。私がそのデモを初めて見たときは、6人しかいなかったんです。集まっても20人ほどだということでした。

そこで私は主催者の方に、「やり続けることは重要なことだけど、もう少し人は集まらないのですか？」と聞いたところ、「沖縄はいろいろな場所で闘いがある。闘えるところで闘うことが重要で、やれることをやればいいんだよ」と言われました。本当に沖縄の人たちは自分のやれることを自分の身の丈でやっているんですよね。その積み重ねが知らない人にも問題を知らせていくことになり、大きな集会につながります。

沖縄では、地方自治のあり方を曲げてまで安倍政権がむちゃくちゃなことをしています。それを放っておいたら、今度は本土に住む自分たちがいつ同じような状態になるかわかりません。千葉の木更津や東京の横田基地にオスプレイが来たりというようにね。

沖縄の問題を本土の問題としてとらえること、沖縄の基地問題は、本土でどれだけの統一戦線をつくれるかが重要です。本土の圧倒的な市民がわかってくれないことにはどうにも解決できないのです。高江や辺野古、伊江島に呼応して声をあげていくこと、自分たちの住む町で自分たちのやれることをやって、そんなもちゃくちゃなことはやらせてはいけないと訴えていくことが必要です。

■少女のお墓を訪ねて

1965年に轢殺された少女のお墓を探していたのですが、ずっとわかりませんでした。今から10年ほど前にもう一度探してもらって、彼女の妹さんと接触できてお墓に案内してもらうことになりましたが、行く予定の数日前に彼女から連絡があり、兄弟に怒られてしまったので申し訳ないが、案内できないと言われました。みんな昔のことを思い出したくないし、かかわりたくなかったそうです。

それでも、どうしてもお線香とお花をあげたいと思い、2015年の夏にあらためてお墓を探し、彼女の一番上のお兄さんの奥さんが場所を教えてくれました。お墓にお参りをしたときに、自宅も教えてもらったのですが、自宅はなんとあの子が轢かれた目の前でした。自宅の正面で轢かれていたんですね。お墓でも線香をあげて、自宅の仏壇でも線香をあげさせてもらい、それでようやく心の荷がおりたように思いました。

米軍基地の問題は、人間として許せません。これにどういう態度をとるのかは、自分の人間性が問われることだと思います。そんな思いで沖縄にずっとかかわってきました。

▶2015年5月17日に那覇で開かれた「戦後70年 止めよう辺野古基地建設！ 沖縄県民大会」

▶2012年3月、伊江島でオスプレイ配備反対の集会を開いた

©嬉野京子 『戦場が見える島 沖縄』新日本出版社（2015）、より

メ取モ材

嬉野さんの取材後に、オスプレイの墜落事故が起きました。抗議をした沖縄県副知事に対し、在沖海兵隊トップが、「パイロットは住宅、住民に被害を与えなかった。感謝されるべきだ」と発言しました。事故とこの発言を聞いて、嬉野さんが語った沖縄の実状は、何も変わっていないことを痛感しました。人権を蹂躙されていることに自分たちの町で怒りの声をだす、やれることをやる、ことの大切さを感じます。